

住民と行政による観光資源を活用した地域人材育成 －岡山県倉敷市岡田地区での金田一耕助イベントを事例に－

難波利光*

gooddeed2010@yahoo.co.jp

<目次>

- | | |
|---------------------------------|---------------------------|
| 1. はじめに | 4. 行政による岡田地区での観光施策と地域人材育成 |
| 2. 本研究の目的と研究の方法 | 5. 考察 |
| 3. 岡田地区まちづくり推進協議会による地域コミュニティの形成 | 6. 結論 |

主題語: コミュニティツーリズム(Community tourism)、地域福祉力(Community welfare power)、ゆるいリーダーシップ(loose leadership)、住民参加(Participation of residents)、地域コミュニティ(Local community)

1. はじめに

近年、地方自治体は、観光施策による地域活性化を行っている。観光施策は、地方経済において裾野が広く、人口減少や少子高齢化を課題とする地方自治体にとっては期待したい施策の一つである。観光施策に必要な財は、観光資源と人的資源である。多くの地方自治体は、観光資源としてモニュメントや博物館など象徴的な建物を建設している。人的資源としては、コンベンションセンターの人的サポートの充実やボランティアガイドなど、行政から直接管理された人の配置を行っている。しかし、地方自治体にとって財政難は今後も続くと考えられ、観光資源に対する費用対効果を考えながらの投資にウエイトをおかなければ財政的に厳しい状況にある。

そこで、地方自治体は、新しい建造物の建設ではなく既存にある観光資源の活用を行っている。それは、歴史的な社会資源である。歴史的な社会資源は、地方自治体の歴史を象徴するような建物が多く、地元住民にとってもアイデンティティを感じる物が多い。また、歴

* 下関私立大学経済学部教授

史的人物の活用は、人物の関わる地域での遺産もあり観光資源になりやすい。これらの歴史的建物や人物を観光資源として活用することは、その地域住民にとって一体となり取り組むインセンティブとなる。ここで生まれる一体感は、地域での活動を活発化させ、地域のwell-beingを高める要素になる。

地域における観光施策で注目したいのが、コミュニティツーリズムである。コミュニティツーリズムは、観光地の住民が観光資源として重要な役割を果たし、観光客と地域住民のコミュニケーションがリピーターに繋がるという観光手法である。このコミュニティツーリズムを上手く活かせるのが、地域住民の地域福祉力である。地域福祉力は、共感に基づく連帯と住民主体が原則である。地域福祉力を高めるためには、自分のできることをして社会に参加し役割を果たすことや、地域住民が地域に関心を持ち地域住民が地域課題を主体的に把握し解決することができる地域人材の育成も行う必要がある。地域共生社会の実現のために、地域における出会いや繋がり場をつくり交流活動を活発化させ、地域福祉を支える人づくりをすることは、観光施策と地域福祉の向上の融合になる。

本研究で取り上げるコミュニティツーリズムでは地域住民が観光資源になるが、地域福祉力を有する地域住民を如何に観光の人的資源として育成することが必要であると考え。これまで観光分野の研究において観光地での他地域からの観光人材の育成について研究が多くみられてきた。本研究では、長年居住している住民が地域福祉力を活かすことにより観光人材を育成できるかについて金田一耕助イベントの事例を通して明らかにする。

2. 本研究の目的と研究の方法

本研究に関する地域コミュニティと観光に関する研究は、以下のような見解を示している。

地域コミュニティの観点からは、地域福祉の場面に市民が参加する意味について、後藤麻里子(2010:234)は、「多様な能力や経験を持った市民が参加することで、その事業やプロジェクト、さらには問題解決への取り組みそのものの質が向上すること」と「参加を通じた市民一人ひとりの意識と行動の変化である」と言っている。つながりをつくる機能について、松端克文(2018:23)は、地域を変える機能であると言っている。原田正樹(2014:100)では、ケアリングコミュニティについて、「共に生き、相互に支えあうことができる地域のこ

とである」としている。また、「こうしたケアリングコミュニティは、①ケアの当事者性(エンパワメント)、②地域自立生活支援(トータルケアシステム)、③参加・協働(ローカルガバナンス)、④共生社会のケア制度政策(ソーシャルインクルージョン)、⑤地域経営(ローカルマネジメント)といった5つの構成要素により成立している」と整理している。

観光まちづくりの観点から西村幸夫(2002:21)は、「観光まちづくりとは、地域が主体となって、自然、文化、歴史、産業、人材など、地域のあらゆる資源を活用することによって、交流を振興し、活力あるまちを実現するための活動であるといえる。つまり、観光まちづくりでは観光はまちづくりの結果のひとつのあらわれであり、まちづくりの仕上げのプロセスを意味している。」とある。つまり、西村幸夫(2002:31)は、「重要な点は最終的なねらいが、いきがいのある拠点をつくるということであり、観光はそのための重要な手段ではあるが、目的ではない」と言っている。また、観光まちづくりの人材として、塩野正人(2019:46)は、「観光地域づくりのリーダーとしての人材、および観光商品・サービスの企画・開発に携われる人材は、主に観光まちづくり推進組織(プラットフォーム)に必要とされる人材であろう」と言っている。他に塩野正人(2019:46)は、「観光地域プロデューサーの役割・資質・スキル・知識などの内、観光地域づくりのリーダーに求められる固有の要素は、地域をまとめる役割、地域づくりに対する見識、人的ネットワークのを構築できること、地域に愛着を持って接すること、根気強さとともにファシリテートする力、市民をまとめる調整スキルなどが該当するであろう」と言っている。

以上の様に、地域コミュニティと観光に必要な人材は、人を大切にし人を纏める力など共通する要素がある。しかし、観光まちづくりに福祉的な人材が適用されるという研究は少ない。そこで本研究は、地方自治体の観光施策による地域コミュニティでの人材育成の可能性について考察を行う。その分析対象として、現在岡山県倉敷市に合併している旧真備町岡田地区での金田一耕助イベントりを事例にとりあげる。金田一耕助は、日本が誇る本格ミステリー作家である横溝正史の作品で出てくる名探偵である。横溝正史は、1902年(明治35年)に神戸市で生まれ、1932年(昭和7年)から作家専業とし、1945年(昭和20年)に戦争のため現在の岡山県倉敷市真備町岡田に疎開のため移住してきた。横溝正史が、1946年(昭和21年)に金田一耕助登場の作品を発表したことから、岡田地区住民にとっては、金田一耕助に愛着をもち、地域観光資源の一つとして考えるようになった。

1) 倉敷市は、金田一耕助の著作権を所有している横溝家とKADOKAWAとの調整を行うという重要な役割を担っている。KADOKAWAは、出版事業、映像事業、著作権事業など多種の事業を行っている。「巡る・金田一耕助の小径」のミステリーガイドブックは、株式会社角川メディアハウスが編集している。

岡田地区は、2018年(平成30年)7月に水害にあっている。そのため本研究に関する資料の多くを失っている。そこで、本研究は、関係者へのヒアリングと関係者により纏められた資料より考察を行う。本研究に関するヒアリングは、2020年(令和2年)11月に実施した。²⁾

3. 岡田地区まちづくり推進協議会による地域コミュニティの形成

3.1 旧真備町の地理的位置づけ

本研究で対象とする倉敷市旧真備町は、<図1>と<図2>の△で示した場所である。倉敷市旧真備町は、日本の西部に位置し、岡山県南部である。現在は、倉敷市と合併しており、倉敷市中心部より北部に位置する。旧真備町は、水島工業地帯のベッドタウンとしての住宅地が増えてきた地区である。最寄りの駅は、JR伯備線の清音駅と井原鉄道の川辺宿駅、吉備真備駅、備中呉妹駅である。JR伯備線の清音駅は、倉敷市旧真備町の東に位置し総社市に立地している。倉敷駅から清音駅までJR在来線で7分である。本論文で取り上げる岡田地区は、清音駅の西に隣接している。旧真備町のイメージは、都市に近い利便性の良い住宅地であり、田舎のイメージはない。交通の便からも生活圏は、主に倉敷市と総社市である。また、歴史的なアイデンティティは総社市である。ベッドタウンとして住み始めた人は、住み続けてから50年もの経過から高齢者となっており、その人達が高齢化することによる社会課題も出てきている。

倉敷市ホームページ³⁾に挙げられている旧真備町の観光資源は、場所としては、真備美しい森・まきび公園・金田一耕助ミステリー遊歩道、人物としては、吉備真備・横溝正史・井上桂園などがある。旧真備町内での岡田地区には、ふるさと歴史館、横溝正史疎開宅、大池の弁天様、岡田廃寺、千光寺などがある。旧真備町は、2005年(平成17年)8月に倉敷市との合併により倉敷市の観光施策に組み込まれることになり、倉敷市と旧真備町との観光連携を自治体間で組むという発想を持たなくても良く、倉敷市における様々な地域の特色を上手く繋げることができ易くなったといえる。

2) 本研究では、ヒアリング対象者に対し、調査目的および方法、プライバシー保護および資料の取り扱いについて説明し同意を得た。ヒアリングの内容は、特定されないように留意している。なお個人名に関しては、イニシャルにて明記することの許可を得ている。

3) 倉敷市ホームページ <https://city.kurashiki.okayama.jp/4109.htm>を参照。



出典) yahoo map



出典) 図表1と同じ。

<図1> 倉敷市旧真備町(中国地方での位置)

<図2> 倉敷市旧真備町(岡山県内での位置)

3.2 岡田地区まちづくり推進協議会

3.2.1 協議会設立の経緯

倉敷市の観光施策を地域住民に伝える際に窓口になるのが、岡田地区まちづくり推進協議会(以下「協議会」という)である。地域住民は、協議会が間に入ることで、倉敷市の観光施策を理解することが容易になっている。

協議会の設立経緯についてみる。岡田地区には、昭和40年代からコミュニティ協議会⁴⁾があった。コミュニティ協議会は、岡田地区において民主的な運営により地域の課題を解決するために自主的に自立して地域のまちづくりに取り組んでいる組織である。コミュニティ協議会構成員は、岡田地区に居住する個人や所在する法人やその他団体である。事業としては、主に地域イベントや運動会などを行っていた。福祉的要素については、社会福祉協議会や民生委員など地域福祉を専門とする機関に委ねていた。資金面では、活動を行うための会費などの集金能力があった。

岡田地区における福祉的な課題の取り組みは専門機関の他に、1991年(平成3年)から1995年(平成7年)までの岡山県第4次総合福祉計画⁵⁾による「地域ぐるみの高齢者福祉のむらづくり事業⁶⁾」で行っていた。岡山県第4次総合福祉計画⁷⁾における長寿社会の実現に向けての施

4) 旧真備町には、7地区(小学校区で6地区、小学校がない地区で1地区の合計7地区)それぞれのコミュニティ協議会があった。

5) 「障害保健福祉研究情報システム」

(https://www.dinf.ne.jp/doc/japanese/law/pref_plan/xp33/xp3301/xp330102.html#B5)より引用。

6) 平成7年度に岡山県全体で1億4,200万円の予算が組まれた。

7) 第4次岡山総合福祉計画は、この新長期ビジョンをよりどころとして策定し、広域交通網の整備による西日本における拠点性の高どまりなど大いなる発展可能性を生かして、新たな交流と発展の具体

策は主要課題であり、具体的な施策は住民、地域、市町村の理解と協力のもとに定着しつつある状況にあった。「地域ぐるみの高齢者福祉のむらづくり事業」は、地域をひとつの家として考え、給食サービスなど地域で必要なサービスを提供するシステムをつくり、地域ぐるみで高齢者を支え合うためにさまざまな活動を行っていた。

また、1996年(平成8年)から2000年(平成12年)までの第5次岡山県総合福祉計画⁸⁾では、2000年(平成12年)から始まった介護保険制度に向けて地域で福祉を支える体制作りを行っている。第5次岡山県総合福祉計画⁹⁾によれば、コミュニティの課題と施策の方向として、「コミュニティ意識の高揚や、コミュニティリーダーの育成、コミュニティ活動の活発化、活動拠点の整備や活用の活発化をはかる。また、住民が一体となって県内各地に点在するふるさととの趣を残す景観や伝統的な町並みを次代に継承していくよう努める。」とある。

旧真備町は、昭和40年代から水島工業地帯のベッドタウンであることから生じる高齢化が進むことによる福祉問題を考えなければならない。これは、岡山県総合福祉計画の第4次と第5次の方向性と酷似している。しかし、岡田地区において、コミュニティ協議会と岡山県第4次総合福祉計画による地域ぐるみの高齢者福祉のむらづくり事業の2本柱は、地域課題を解決する上で複雑化することから、協議会に1本化することとし、1998年(平成10年)から協議会に入り2000年(平成12年)に設立された。協議会の設立により、これまで行っていたイベント中心のコミュニティ協議会と福祉課題解決の地域ぐるみの高齢者福祉のむらづくり事業をまとめられたことになる。

3.2.2 協議会の組織構造

協議会の目的は、同協議会の規約によると、「快適な環境でいきいきと暮らせる、心豊かなコミュニティの実践を目指して、地域住民をはじめ各種団体等の協力と強調のもとに人にやさしいやすらぎと活力のあるまちづくりを推進するものとする」¹⁰⁾とある。岡田地区の

的な施策を展開し、真の豊かさが実感できる郷土を築くとともに、21世紀へ向けて美しい環境のなかでゆとりといきがいのある生活をおくることのできる「活力ある成熟社会・おかやま」の実現を目標としてきた。

8) 「障害保健福祉研究情報システム」

(https://www.dinf.ne.jp/doc/japanese/law/pref_plan/xp33/xp3301/xp330102.html#B5)より引用。

9) 第5次岡山県総合福祉計画では、コミュニティの現状に対して、「地域住民の連帯感の希薄化をはじめ、価値観の多様化、都市化のもとで、個人や地域がかかえる課題を地域住民全体の力で自主的に解決し、さらに生活環境を向上していくためには住、民相互の主體的な協力や参加が不可欠で、その基盤となるものがコミュニティであり、近年では、地域内の活動だけではなく他の地域との交流にも取り組み、活動の輪も広がるなどコミュニティ活動は、着実に地域に根づいたものとなってきている。」と述べている。

全員が会員であることから、全ての意見を集約することができ、地域の課題を取りまとめる役割を担っている。

協議会の組織は、「地区内の各種団体・各町内会等から選出または推薦されたもの等をもってあてる」¹⁰⁾とある。また、役員の選出による地区委員、各種団体委員は、各地区及び各種団体で選出される¹²⁾。2020年(令和2年)総会要領によると、地区委員が選出される各町内会は、総世帯数1、185で6地区に分けられている。従って、第1地区14名、第2地区10名、第3地区8名、第4地区6名、第5地区7名、第6地区11名の合計56名が選出されている。各種団体委員は、22団体から複数選出されており40名である。事務局は、会長1名、副会長2名、事務局長1名、他17名で合計21名である。従って、合計117名もの役員と委員で構成されていることになる。

これだけ多くの住民が組織に関わると岡田地区全体の状況を協議会の中で掌握することができ、きめ細かい住民の生活状況を会議で踏まえることが可能になっている。また、協議会で決まったことを岡田地区全体に周知徹底することも容易である。地域活動のPRや情報交換を円滑に行うために適切な仕組みであるといえる。よって、協議会は、地区委員、各種団体、事務局の3つの組織により運営されている。本協議会を運営するための経費は、会費・市補助金・寄付金・その他の収入を以てあてている¹³⁾。協議会委員は、ヒアリングによると「60代が中心のお友達組織」になっている。「60代が中心のお友達組織」は、60代という地域の文化に精通した地域地縁関係が深い人達の組織である。

組織の3つの特徴は、地区委員は自治会的な役割、各種団体はコミュニティ協議会のような役割、事務局は観光部局のような役割を担っていることである。協議会は、事務局を通して金田一耕助を観光資源として売り出すことが一つの目的になっている。事務局には、地区委員や各種団体委員の代表職務を終えた協議会活動に前向きな人々が多く入り、金田一耕助イベントをバックアップする体制が十分に整っている。

3.2.3 協議会のイベント内容

協議会が行う令和2年度の活動内容は、23項目ある。その活動内容は、実行委員会、ふれあい班、ゆめづくり班、事務局の大きく4つの担当に分かれている。実行委員会の担当は、

10) 協議会規約第3条。

11) 協議会規約第4条。

12) 協議会規約第8条4項。

13) 協議会規約第15条。

金田一耕助春の誕生会、真備船穂総踊り、秋祭り、防災研修会、ふれあい市、歩け歩け運動、グランドゴルフ、運営委員会・役員会、菖蒲園復興、高齢者いきいき活動、行事PRである。ふれあい班は、大運動会、菖蒲祭り、夏祭りである。ゆめづくり班は、花の植替え、花のみずやりである。事務局は、総会、金田一イベント(1000人の金田一耕助)、広報である。他の活動内容は、交通安全、岡田・辻田分館・菖蒲園清掃、幼稚園児と高齢者の交流、農園作業である。

協議会内の組織に分けて活動内容をみると、各種団体はふれあい班のみ¹⁴⁾であり、地区委員は地区別の担当でふれあい班とゆめづくり班に分かれて活動している。地区委員は、活動をするときに、町内会担当者が決まっているため関わり方が明確である。ふれあい班とゆめづくり班の活動の役割は、ふれあい班が定例の大きなイベント中心であり、ゆめづくり班が美化中心¹⁵⁾になっている。このような班分けの明確化は、協議会でのイベントと地域福祉的な活動を円滑に行うための工夫である。また、日頃からの各町内会同士の交流は、金田一耕助イベントの際の協力体制にも繋がっている。

金田一耕助関連活動は活動内容でも見たように、実行委員会による「金田一耕助春の誕生会」と事務局他による金田一イベント(「1000人の金田一耕助」)がある。協議会の活動は、金田一耕助関連活動が地区外への発信を主にしており、それ以外は地区内へ発信する内容になっている。協議会が地区づくりの精神をどう繋げているかで活動計画が変わってくる。協議会の外部発信は、岡田地区が金田一耕助に関するアイデンティティを浸透させることで、岡田地域住民の一体感を高めることになる。

4. 行政による岡田地区での観光施策と地域人材育成

4.1 行政による岡田地区での観光施策の経緯

4.1.1 倉敷市真備ふるさと歴史館・倉敷市横溝正史疎開宅の経緯

倉敷市は、倉敷市観光情報の中で旧真備町の観光説明をしている¹⁶⁾。倉敷市としては、

14) 各種団体の中で、消防団岡田分団、真備・岡田の復興・再生を考える会のみ、活動計画にはないが防災を担当している。

15) 岡山県全体の取り組みである花いっぱい運動による環境美化活動である。

16) 倉敷市観光情報の中には、行政区割りでの支所として児島支所、水島支所、真備支所が取り上げら

旧真備町を観光の一つの拠点として考えており、倉敷市駅周辺にある美観地区とともに広域観光として捉えている。旧真備町の観光資源は歴史的な物が多く、地域住民は、親近感を持つ財産であると感じている。旧真備町の観光は、主に吉備真備を活用した観光事業であったが、金田一耕助の観光化を行ったことで観光資源に膨らみが見えた。そこで、金田一耕助を観光資源として地区外に広めるために倉敷市が力を入れた施設が、倉敷市真備ふるさと歴史館と倉敷市横溝正史疎開宅である。

倉敷市真備ふるさと歴史館(以下、ふるさと歴史館という。)¹⁷⁾は、1994年(平成6年)7月に開館され、岡田藩等に関する歴史資料の収集、管理及び活用を図り、市民の教養及び文化の向上に寄与することを目的¹⁷⁾としている。ふるさと歴史館は、観光にも繋げている。ふるさと歴史館で所蔵している古文書は、地元へ根ざした観光を行う上で歴史的観光資源となる。また、地域住民にとっても、地元の価値を再確認することができ地域と歴史を繋げる重要な施設である。

倉敷市横溝正史疎開宅(以下、疎開宅という。)¹⁸⁾は、2002年(平成14年)10月に開館され、郷土ゆかりの作家横溝正史を顕彰するとともに、その疎開宅を保存することにより、市民の教養及び文化の向上に寄与することを目的¹⁸⁾としている。疎開宅は、横溝正史¹⁹⁾が1945年(昭和20年)4月から1948年(昭和23年)7月までのおよそ3年半を過ごした住宅である。疎開宅は、疎開宅管理組合と文化産業局の文化振興課が運営しており、歴史的資源としての活用を考えている。疎開宅は、岡田地域住民の集会場所というサードスペース的な役割はもっていないが、近隣の小学校の社会科見学等の地域教育の施設として岡田地域住民への社会教育と文化を結びつけた学びの場となっている。すなわち、疎開宅は、地域住民としての居場所ではなく、観光客と地域住民が金田一耕助をテーマに交流する場所である。

倉敷市がこれら2つの施設の観光利用に力を入れ始めたのは、「1000人の金田一耕助」イベントを始めてからである。

4.1.2 金田一耕助イベントに至る経緯(平成14年~平成18年)

金田一耕助イベントである「1000人の金田一耕助」は、2009年(平成21年)11月22日に初めて行われた。岡田地区における倉敷市の観光事業の始まりといえる。「1000人の金田一耕助」

れている。

17) 倉敷市真備ふるさと歴史館条例第1条の目的及び設置を参照。

18) 倉敷市横溝正史疎開宅条例第1条の目的及び設置を参照。

19) 横溝正史の著書には、『犬神家の一族』、『悪魔が来たりて笛を吹く』、『八つ墓村』、『本陣殺人事件・蝶々殺人事件』、『白と黒』、『獄門島』、『悪魔の手毬唄』、『女王蜂』などがある。

を始めるにあたり、岡田地区でそれまでの様な取り組みをしていたのかという経緯をまとめる。

2002年(平成14年)9月に、まちづくりシンポジウム「すくすくまちづくり交流集会」が開かれた。真備町でのシンポジウムは、町制50周年の祝賀会であり、真備町の7つの地域からそれぞれ誇れるものを探し、地区の特徴を紹介するというテーマが課せられていた。真備町は、吉備真備しか外部に発信するものがなく、地区別の特徴を出すことが難しい中で、岡田地区は、金田一耕助を特徴として挙げた。またシンポジウムの動きとは別に、町外の金田一耕助ファンが、疎開宅開館前に1回だけ疎開宅で横溝正史生誕100年イベントを行い大きな反響があった。この時、旧真備町が疎開宅を購入したことを岡田地域住民が評価した。このことが、この後の金田一耕助イベントへの布石となる。

2005年(平成17年)6月に、第1回しょうぶ祭りで岡田地区のA氏が金田一耕助を演じている。これがその後、寸劇を続ける切っ掛けになった。

4.1.3「1000人の金田一耕助」イベントにおける行政の取組(平成21年~)

岡田地区にとって、金田一イベントで特に重要なのは、2009年(平成21年)11月から始めた「1000人の金田一耕助」と2015年(平成27年)4月から始めた「金田一耕助春の誕生会」の2つのイベントである。

「1000人の金田一耕助」は、「巡・金田一耕助の小径」イベントの中で行われた倉敷市の事業である。2009年(平成21年)の「1000人の金田一耕助」の折りは、倉敷市が実施主体であるが、協議会を中心とする地域住民がおもてなしとして訪問者に甘酒接待を行っている。このイベントの来訪者への観点が、倉敷市と地域住民の立場によって異なっている。倉敷市からみると観光客であるが、地域住民にとっては来訪参加者であるという視点である。この視点の違いは、地域住民にとって、来訪者を地域住民の参加者と同じ目線で捉えることで、心の距離感を縮めているといえる。更に地域住民は、来訪者に対してボランティア的な活動ではなく、楽しんでもらって帰るためには何をしたら良いのかを考えて行動したのである。疎開宅・ふるさと歴史館は、場所として重要であるが、岡田地域住民による来訪参加者に対する「おせたい」が地域住民の繋がりを深めることによる地域福祉的な要素を作っていく。

また、協議会は、金田一耕助の小説に出てくる要所の街角で寸劇を行っている。岡田地区の金田一耕助に関わる物質的な物を見せるだけではなく、人が寸劇をしたことが感動を与えたといえる。その寸劇についてマスメディアが興味を抱き全国的なニュースになっ

た。配役の住民は、寸劇の練習をせず来訪参加者に見せている。それは、住民の負担にならないようにし配役の必要な箇所だけ練習し、地域住民の参加者の楽しみを作ることに徹底したのである。ここで行われた寸劇は、岡田地区で2002年(平成14年)から行われていたためできたことである。

協議会が、倉敷市とイベントの内容を摺り合わせたのは、2011年(平成23年)の第3回目からである。その理由は、岡田地域住民とともに「1000人の金田一耕助」を進めていくために協議会と摺り合わせを行うことで、スムーズな運営ができるからである。倉敷市と協議会が繋がると人の繋がりが組織的にもできるため、倉敷市担当者が辞めても継続される面でも良い点である。

「金田一耕助春の誕生会」は、岡田地域住民の提案により始まった。このイベントは、2009年(平成21年)から2015年(平成27年)までの「1000人の金田一耕助」の成果・蓄積により春祭りが生まれた。また、「1000人の金田一耕助」で協議会事務局が寸劇の役者をしたことが、岡田地域住民を動かした。寸劇を地区外の寸劇のプロにお願いして演じてもらうのではなく、身近な人たちが行ったことが要因と考えられる。開催内容でも、岡田地域外の人々に演奏や踊りを依頼してではなく、地元の中学校や地区での伝統的神楽を組み込んだことも要因である。神楽は、金田一耕助が活躍する小説でも出てくることから、岡田地域住民の伝統的文化と金田一耕助とを結びつけた。金田一イベントと伝統的文化が融合されたことで、地区の地域福祉を育てる要因になったことの意味は大きい。

「金田一耕助春の誕生会」開始と時を同じくして、2015年(平成27年)から「1000人の金田一耕助」来訪参加者が100人を超えた。この時期を境に、沿道で地元の人が拍手で迎えるようになった。協議会の人々が行っている寸劇が一度でできない程の賑わいであった。また、女性の来訪参加者が増えた。この成果は、地域住民の方のSNSによる日頃からの金田一耕助イベントなどの発信が起こした現象と思われる。金田一耕助イベントが地域外へ広められるようになったことで、観光を通じた地域住民に新たな価値が高められた。

最後に、金田一耕助イベント関連事業およびイベント年表を<表1>に示す。

〈表1〉 金田一耕助イベント関連事業およびイベント年表

1945年(昭和20年)4月	横溝正史疎開宅生活開始
1948年(昭和23年)7月	横溝正史疎開宅生活終了
1991年(平成3年)	岡山県第4次総合福祉計画による「地域ぐるみの高齢者福祉のむらづくり事業」
1994年(平成6年)7月	倉敷市真備ふるさと歴史館開館
1996年(平成8年)	第5次岡山県総合福祉計画
2002年(平成14年)9月	まちづくりシンポジウム「すくすくまちづくり交流集会」
2002年(平成14年)10月	倉敷市横溝正史疎開宅開館
2002年(平成14年)10月	岡田地区での寸劇開始
2005年(平成17年)6月	第1回しょうぶ祭り
2005年(平成17年)8月	倉敷市と真備町が合併
2009年(平成21年)11月	1,000人の金田一耕助イベント初回
2015年(平成27年)4月	金田一耕助春の誕生日会

出典) 執筆者作成

4.2 観光施策が岡田地域住民と協議会に与えた影響

4.2.1 「1000人の金田一耕助」での仮装イベントとファン

「1000人の金田一耕助」で注目すべき2つの視点がある。それは、仮装イベント²⁰⁾とファンである。

仮装イベントを行うに至ったのは、二松学舎の教員からの提案で、「1000人の金田一耕助」が岡田地区を行脚すると目立ち話題性があるとの意見から始まった。その後、旧真備町の住民である公務員、真備の風土を掴んでいる公務員、金田一耕助に感心の深い公務員らによって気軽な会合が行われた。この人たちが集まったことは、偶発的要因である。協議会は、旧真備町のこれらの展開とは別に、倉敷市のイベントに関する会議等はなく独自に仮装に対する対応を考えていた。これらのそれぞれの行動が、「1000人の金田一耕助」での仮装イベントに繋がっていった。その結果、倉敷市は、仮装イベントの募集・告知・案内・当日対応・保全を行い、協議会は、寸劇・おもてなしを行ったことになる。

仮装イベントは、倉敷市が観光客誘致を行い、地区が仮装で寸劇を行うという役割分担

20) 仮装とコスプレの相違点は仮装はファンがする衣装であり、コスプレはマニアがする衣装であると定義する。ここでの仮装は、金田一耕助のストーリーに関係性があり横溝正史をリスペクトしている衣装である。

がある。来訪参加者の仮装と地域住民の仮装との融合が、お互いにゆるい仮装の関係性の中でお互いの距離を縮めている。地域住民の参加者だけの仮装では、地区との一体感に欠ける地区の様相になってしまう。協議会事務局が毎回仮装にアレンジをかけることも来訪参加者のリピーターを呼ぶ要因になっている。イベントで寸劇の説明を関係者が突然始めたりすることもその一つである。

「1000人の金田一耕助」に参加する観光客らは、金田一耕助のファンである。倉敷市にとって岡田地区は、ファンに支えられる町を目指している。岡田地区以外の観光客を受け入れる体制を整えながら協議会は、地域住民との関係性を深めている。まちづくり考える際に、観光事業と共に地域福祉にも重きをおいている。

金田一耕助イベントを観光と捉えるのか文化振興と捉えるかによりまちづくりの形が異なる。観光は、色々な人を受け入れてもらい、実際に来てもらわなければならない。文化振興は、金田一耕助文化を支えてくれるファンに注目してもらうことを期待している。観光と捉えても文化振興と捉えてもミステリーという観点で金田一耕助を捉えると、観光客に対する岡田地区の文化振興が上手く働いていると考えられる。金田一耕助イベントの時には、コアな住民とコアな観光客との出会いが、新たな岡田地区を作り出すことに繋がっている。更に、住民によるおもてなしの心は、地域での人に対する接し方を良くし、人のことを考えることによる住民の福祉的な一面を育てることになる。

特に、疎開宅に訪れるファンとの交流は、岡田地区の住民に影響を及ぼしている。平成14年に疎開宅を開館してからファンが来るようになった。その時から徐々に、一般観光客が来客するようになり、岡田地域住民が岡田を知ってもらえることに喜びを感じるようになった。そこで、おもてなしをより一層楽しむようになった。2009年(平成21年)に「1000人の金田一耕助」イベントの終了後に懇親会が行われた。懇親会では、地域住民が作成した金田一耕助に関するカルタをするなどの交流が行われている。懇親会は、疎開宅で行われていたが、疎開宅では手狭になり2012年(平成24年)には公民館での開催へと拡大している。疎開宅は、観光的施設として利用したが、本来観光として使わない公民館の活用になった。公民館は、協議会の受け皿もあることで岡田地域住民とファンとの交流の場になっている。しかし、疎開宅は観光地であるが、協議会のある公民館はイベントのみであるから日常での観光客への「おせたい」は難しい状況にある。

地域イベントをイベントだけで終わらせるのではなく、地域の人々や協議会の人々との交流を行うことで、岡田地域住民とファンとの密接な関係ができ、また岡田地区での金田一耕助イベントに参加するというリピーターへと繋がるのが期待できる。また、ファン

だけの参加では、「1000人の金田一耕助」への来訪参加者は限定的であるが、注目度を高めていけば、一般の人たちも行きたくなる衝動に駆られると思われる。

4.2.2 ふるさと歴史館・疎開宅と協議会の関わり

倉敷市が観光資源を作ったら終わりであったものを地域が上手く活用できるかは課題である。行政が作ったインフラを地区がどう使おうかとまちづくり推進協議会で考えることがインフラの活用になる。行政が作ったインフラを本来の目的としてだけの活用ではなく、地域住民が、地域に活かす利用の仕方を行政との相談の上で有効活用することは、着地型観光²¹⁾のために必要である。そこで、協議会によるふるさと歴史館・疎開宅の活用についてみる。

ふるさと歴史館と疎開宅は、協議会の各種団体に含まれている。従って、岡田地域住民からふるさと歴史館や疎開宅の利用について意見が挙がってきた場合には、協議会は、ふるさと歴史館と疎開宅と協議をして利用方法を決めることができる。また、協議会に挙がっていないものに関しては、岡田地域住民が行うことになる。「1000人の金田一耕助」については、協議会は開催主催者ではなく、倉敷市のお手伝いを自主的に行っているイベントであるため協議会事務局が独自に対応していることになる。しかし、「1000人の金田一耕助」が協議会活動に入っているのは、協議会としても大規模であり毎年取り組むイベントだからである。

疎開宅は、倉敷市の観光資源であるから観光客と繋がっているが、公民館で活動を行っている協議会のメンバーは観光客と日頃繋がることがない。この点は、協議会による観光提案がしにくい要素になっている。従って、協議会のメンバーも疎開宅との交流を更に活発にし、観光客との接点を多くし、金田一耕助イベントへのアイデア構築の機会を増やすことが望まれる。このことは、行政施設と地域組織との連携をする場所を設けたことになり、サードプレイスの様な役割を疎開宅が担うことができる。

4.2.3 ボランティアガイド的な「おせったい」

岡田地区の観光について協議会は、観光の窓口と倉敷市のイベントの手伝いをしている。秋に行われる「1000人の金田一耕助」と春に行われる「金田一耕助春の誕生会」以外は、イベントの手伝いが主である。これらのイベントの手伝いは、協議会事務局が地区のボラ

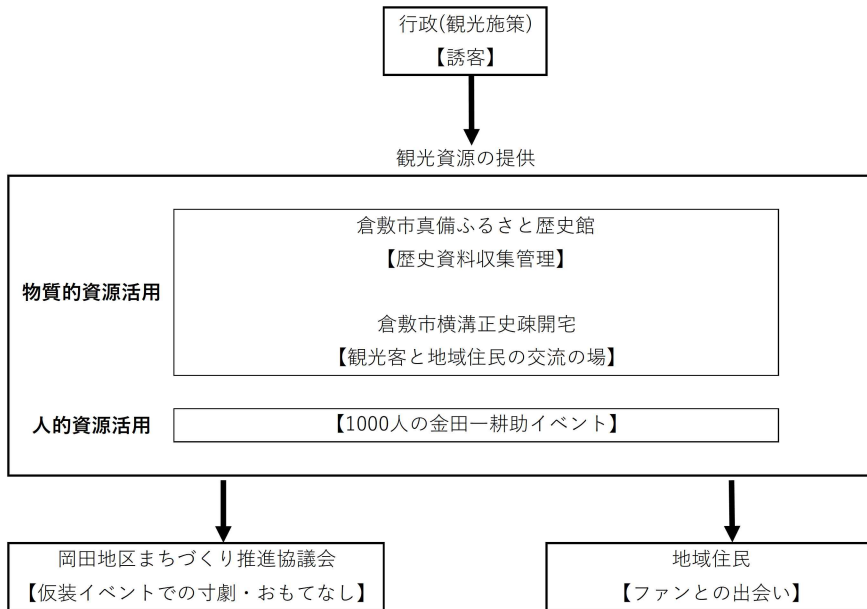
21) これまで、金田一耕助の本が読める場所の提案や体験型の提案などがされてきた。

ンティアガイドとしての役割を担っている。しかし、協議会事務局にとってボランティアガイドとしてではなく、おもてなしとしてのガイドを行っている意識が強い。それは、ボランティアガイドというルール化された組織活動になると、規則など枠が設けられるため填まったものになる。このことが本来行いたい観光客への「おせたい」という対応ができなくなる。「おせたい」を行うのは、ボランティアガイドとして求められる知識やマナーを押しつけられる物としてではなく、観光客を不愉快にさせないためのおもてなしをすることに意味があるのである。「おせたい」によるおもてなしは、コミュニティでも近隣を不機嫌にしない地域教育である。岡田地区では、ボランティアガイドのような行動が「おせたい」という日頃からのおもてなしの心でできているので、不満もなく続いている。同様に、疎開宅の「おせたい」も岡田地区と同じマインドから行われている。

倉敷市の観光事業としての金田一耕助イベントに岡田地域住民が倉敷市の組織に入っていくことは、岡田地区の「おせたい」によるおもてなしができなくなることから、倉敷市に協力する形で行うことが観光客に対して最適な関係であると思われる。

4.2.4 行政による観光施策が岡田地区まちづくり推進協議会と地域住民に与える影響

以上述べた行政による観光施策が岡田地区まちづくり推進協議会と地域住民に与える影響について<図3>に纏めた。倉敷市による行政の観光施策は、観光資源の提供で観光客の誘客を目的として社会資源の活用を行っている。観光資源は、物質的資源と人的資源がある。物質的資源としては、倉敷市真備ふるさと歴史館と倉敷市横溝正史疎開宅が活用されている。倉敷市真備ふるさと歴史館は、歴史資料収集管理を行い観光客の学びの場を提供している。また、倉敷市横溝正史疎開宅は、観光客と地域住民の交流の場を提供している。人的資源としては、1000人の金田一耕助イベントを通して、地域観光に携わる人材を提供している。これらの行政による観光資源の提供は、協議会と地域住民に影響を及ぼしている。協議会には、仮装イベントでの寸劇やおもてなしを行うことにより観光資源としての人材育成を行うことができている。地域住民には、ファンとの出会いを生むことができ、住民のアイデンティティを高める切っ掛けになっている。



出典) 執筆者作成

<図3> 行政による観光施策が岡田地区まちづくり推進協議会と地域住民に与える影響の関係図

4.3 協議会と地域福祉

4.3.1 人材育成

田地区は、これまでも見たとおり、「1000人の金田一耕助」イベントでも、自発的に観光客のおもてなしをしたいという地域である。その精神は、地区の教育や福祉課題など何かをみつければという好奇心の高さが伺える。

「1000人の金田一耕助」をはじめ、協議会発足当初から運営の中心的な役割を担っている人は、A氏とB氏である。

「1000人の金田一耕助」は、倉敷市の事業として始まったが、見ているだけでは無駄だから、何かやろうという思いが行動に移させたのである。その思いにさせたのは、2002年(平成14年)から岡田地区で金田一耕助に関する活動を行っていたことが動機付けになっている。倉敷市は、疎開宅を活用し岡田地域住民との関わりを持たせたいという気持ちはあったことから、スムーズにリンクすることができた。また、A氏が協議会での活動を毎回バージョンアップをしたいと考えていたこともリンクできた要因である。

A氏とB氏は、おもてなしの心を持ち、金田一耕助イベントと地域を少しでも良くしようと思う岡田地域住民とを結びつけたのである。そこでの取り組み方として、無理をせずできることを行う・自分に必要なことだけ行う・全員が全体像を理解しなくてよいの3つを心がけている。それは、A氏とB氏が、柔らかいリーダー像として人材育成の軸になっていることが重要である。

柔らかいリーダー像に着目するに至ったのは、観光庁が2015年(平成27年)3月に「人育てから始める観光地域づくりー観光地域づくり人材育成実践ハンドブック2015」の中で示している観光地域づくりの人材について指摘した内容を見たからである。このハンドブックには、「観光通地域づくり」とは、この「住んでよし、訪れてよし」を実現していくための活動のことで、そのことによって、住まう人たちの人間性を豊かにし、経済力を含めた地域力を高めていくと同時に、訪れる人たちの精神的充足を養うことを目指すものであると言っている。また、観光地域づくりの中核となる人材の育成の必要性として、①地域に対して誇りと愛着を感じている人材、②組織・集団をまとめる役割を担うリーダーとしての組織管理、戦略的思考等の理解や、洞察力、構想力のある人材、③利害関係者の相互理解や信頼関係を構築する対人対応力、対話力がある人材、④事業に潜む各種の危険性に備えるリスク分析や危険回避策、不測の事態が発生した際の効果的・効率的な対応がとれる人材、⑤地域資源を活かした観光地域の形成を促進させる観光戦略プランの策定、地域づくり、環境の整備等が推進できる人材の5つを挙げている。

柔らかいリーダーは、観光庁が求めている①から⑤のリーダー要素よりも、観光庁が地域の人材を育成するために「地域への強い思いといった志の高さや、地域の人間関係への十分な理解、取組の持続性・継続性などが求められている」と述べている要素が必要であると思われる。地域づくりを地元住民と共に行うためには、強いリーダーでは纏めることができず、地域に溶け込む柔らかい人間関係性を持つことが重要であると考えられる。

A氏とB氏は、横溝正史の知識がなかったが、2002年(平成14年)から勉強を始めた。この姿勢は、金田一耕助イベントを支えようとする人たちが成長しようとする力になっている。また、活動しながら決めていく手法である。A氏とB氏は、イベント準備や当日に急な申し入れを関係者にすることも多い。それは、地区での活動は臨機応変さが求められ、状況に合わせた変化を受け止める体制作りが必要だからである。A氏とB氏は、地区をつくるより人を作ることを心がけていた。地域を作るのではなくて人を楽しませる。倉敷市や協議会は、緩やかな共同体による生きがいづくりができている。

次の企画を考える上でA氏とB氏が考慮したことは、協議会委員事務局を中心にキャラ

クターに当てはめて配役を決めることである。金田一耕助イベントで工夫していることは、企画の足し算を行うことである。新しい物を考えるのは大変であるが、人を楽しませることができれば、仕事が増えても負担感を感じない。前回との変化に気づくことが金田一耕助イベントの地域住民の参加者の増加に繋がる。

2人が「1000人の金田一耕助」をまとめることができた要素は2つある。一つは、子育てを通して小学校PTAの時期から子ども達や地域の人々との繋がりを持っていたからである。それは、子ども達や地域の方を楽しませたいという思いからの取り組みをもっていたのである。この思いは培われ、協議会での立場でもPTAでの経験を活かした活動に取り組んでいるのである。また、当時のPTAの体制のあり方にも関係がある。当時のPTAの職を長く続けることができ、継続して取り組むことで、毎年新たな取り組みを考え実践することができたのである。PTAの活動は、協議会での活動と準じるところがあるようである。PTAの職を毎年変わるという状況にある場合には、この様な経験を積むことができず、地域と子どもを育てる機会を失うかもしれない。

もう一つは、行政職員という職歴である。A氏は、技術職として真備町の職員から合併後倉敷市の職員になった。A氏は、技術職であることから物を作ることが好きで、金田一耕助イベントに関わる小物などのグッズの作成を行っている。金田一耕助イベントには欠かせない寸劇を始めたのも、地区で新しいことの取組を行いたいという一心からである。物を作り、それを活用してもらうことを重ねてきた経験は、地区の人たちを纏める力にもなっている。また、B氏は、養護教諭である。以前から人形劇で子ども達を楽しませたいという思いから活動を続けている。養護教諭という仕事柄、人と話をするのが好きであり話上手でもある。相手に分かり易く話し、理解してもらい、信頼をえるということを日頃から心がけている。また、楽しくするためのアイデアを出すことも楽しみの一つとしている。

A氏とB氏は、行政職員であるが、地域住民と意識的に深く接するよう注意を払っている。行政職員であることが福祉的な人材であることではなく、行政職員であると同時に人間性が福祉的な人材であるということがいえる。

また、A氏とB氏は、地域福祉力を有しているといえる。両氏は、地域福祉力の定義である、共感に基づく連帯と住民主体を原則として行動している地域住民である。岡田地区に60年以上住み続けていることから、地域住民や地域文化について精通しており、地域住民と観光客を結びつける要素を早く見つけることができる。それは、日常の仕事や仕事以外での帯域住民との関わりの中から地域課題を主体的に把握する感性を持っているといえる。

すなわち、A氏とB氏は、岡田地区においてキーパーソンの一人であるといえる。この人材は、偶発的に存在した人達であるが、同様な素養を持っている人達を育成することにより、地域を動かす人員が増えることが期待できる。

以上のことから、表2に協議会と地域福祉との関係性について纏めた。両者は、観光地としての地域住民の人材育成を行うための要素が類似していることが分かる。協議会の一つの役割として観光部局のような役割がある。その役割が、地域課題をとりまとめる過程の中で人材を育成し、長年と続く地域住民の人間関係から地域福祉の担い手としての役割と柔軟いリーダー作りに作りだすことが可能になる。

<表2> 協議会と地域福祉との関係

岡田地区まちづくり推進協議会	
目的	「快適な環境でいききと暮せる、心豊かなコミュニティの実践を目指して、地域住民をはじめ各種団体等の協力と強調のもとに人にやさしいやらぎと活力のあるまちづくりを推進するものとする」
会員	岡田地区の全員
役割	地域課題を取りまとめる
機能	岡田地域区全体の状況把握・議決内容の周知徹底・円滑な地域活動のPRや情報交換

地域福祉の担い手	
目的	「快適な環境でいききと暮せる、心豊かなコミュニティの実践を目指して、地域住民をはじめ各種団体等の協力と強調のもとに人にやさしいやらぎと活力のあるまちづくりを推進するものとする」
担い手	岡田地区の全員
役割	地域課題を取りまとめる
求められる人材	岡田地域区全体の状況把握・議決内容の周知徹底・円滑な地域活動のPRや情報交換

出典) 執筆者作成

4.3.2 地域教育としての金田一耕助イベントの意義

本論文で地域教育は、地域についての学びを行ったり、人間関係を築くことをいう。金田一耕助イベントを通して、岡田地域住民が観光客との交流をもつことで地域教育ができ

ている。協議会の組織構造は、地域教育を行う上での基礎になっている。協議会活動の基本的な活動は、ふれあい班とゆめづくり班で行い、他地区との関連がある活動に関しては、実行委員会で行っている。ふれあい班とゆめづくり班の2つにしたのは、2009年(平成21年)以前は細かく委員を設けていたが地区に纏まりをもたせるためにスリム化させたのである。また、金田一耕助イベントに関しては、疎開宅と協議会が一体となり取り組んでいる。地域を動かすための人材の継承は、地域委員と各諸団体のリタイア組が事務局メンバー21名に入っていることで行われている。

協議会は福祉的課題に取り組まず、福祉課題は社協や民生委員に任せるとする他の協議会とは異なった取り組みにしている。これは、welfareといわれる福祉の対象となる社会的弱者の救済を福祉の専門機関に任せ、well-beingといわれる自主的に自己実現を求める事を保障することを協議会の対象にしていることになる。岡田地区では、疎開宅で現在の過疎宅管理組合長が花を育てる取り組みを行っている。この取り組みは、岡田地区観光の目玉になるほどの人気となり大きくマスメディアにも取り上げられている。また、地元の小学3年生に金田一耕助を学ぶ学外学習が行われている。これらの取り組みにより、地域の人々に金田一耕助に関わる施設というだけではなく、教育や文化を通して地区の人々を巻き込むことができているといえる。

「金田一耕助春の誕生会」は、岡田地区の祭りや金田一耕助イベントの融合である。岡田地域住民の参加と金田一耕助の小説内に出てくる関係機関を連想させる団体とで、地域福祉と観光の融合ができているといえる。

地域教育の広がりや、岡田地区の金田一耕助に纏わる場所を活用して寸劇を行ってきたことが影響している。寸劇は、地域住民の関心を高め、受け入れやすいツールである。書籍による伝達と違い、見ることで文化を一見にして学ぶことができる。したがって、協議会事務局の活動は、活動範囲も広がり、岡田地区に隣接している川辺地区でも取り組み、圏内イベントにも出張して寸劇を行っている。ここで携わっている寸劇のメンバーこそが、地域福祉的な集まりであるといえる。

岡田地区での金田一耕助に纏わる勉強会が2011年(平成23年)から2012年(平成24年)の間に月1回開催されたことは、地域学ともいえるべき学びの場であった。その思いは、岡田地区を訪れる観光客をもてなすために、岡田地区の人たちが知識を得ることの喜びを得ようとするところから始まっている。観光地に訪れても地元の人々に根付いていないコンテンツは、観光客に受け入れてもらうことが難しい。地元の人たちと観光客との知識の共有は、その地の新たな価値を創造する切っ掛けにもなる。この学びを歴史にまつわる文化を有してい

る地で行うことに更なる意味がある。それは、学んだことを直ぐさまに実在する歴史空間で楽しむことができるからである。この様に、地元住民、観光客、歴史資源が一体化することで地域教育を育むことができるのである。

5. 考察

倉敷市真備町の岡田地区で金田一耕助イベントが、地域コミュニティによる人材育成を行うためのツールとなっていることについて具体的な事例に基づいて検証した。岡田地区まちづくり協議会は、この協議会ができる前のコミュニティ協議会の延長上として金田一耕助イベントを行っており、その他の活動として、岡山県が行っていた地域福祉に関わる取組を行っている。すなわち、地区外と地区内への観光と福祉のアプローチを行うことができる協議会であるといえる。協議会役員や委員が、日頃から地域の福祉的な活動に関わっているから、地域住民は、金田一イベントへの参加を容易に受け入れることができる。

また、地区委員・各種団体・事務局を合わせて117人もの役員を設けることにより、地区課題の集約をきめ細かく行うことができ、倉敷市は岡田地域住民との直接的な話し合いによる意見収集を行わなくてもよいことから効率的な倉敷市と岡田地区との関係が成り立っている。

「1000人の金田一耕助」を岡田地区の観光の柱にできたのは、実施する8年も前から地域住民が寸劇の形で取り組んでいたからである。地区のアイデンティティを地域住民自らが見つけ、観光客として地区に来る人たちに対しての「おせったい」というおもてなしを自然に行っていることは、地域福祉を共同体のなかで作りだしてきたことに他ならない。この地域を思う住民の気持ちが、「金田一耕助春の誕生会」を開催させたことで、地区の教育・文化との融合を行った証となった。

極めて一般的であるが、倉敷市は、観光施策を行う際に、観光施策が経済的な視点で作られるために福祉的な意味合いを持たせながら取り組むことはない。しかし、観光施策を突き詰めると福祉施策になる。特に、コミュニティツーリズムの中では、住民が受け入れないと観光はできないことから、地域住民の住民生活と一体であることは観光施策に欠かせない。旧真備町としてではなく、岡田地区という狭い地域で観光やまちづくりを考えることは、地区の人たちの文化やアイデンティティを取り入れることができる。このことか

ら地域福祉の視点からの観光への組織作りや人材の育成にも関連させることができると考えられる。

岡田地区の住民は、日常的に観光に携わっていないことから、観光事業に関わらない傾向にある。この点は、比較的他地域でも取られている行動である。住宅地にある観光資源を活かすために住民と観光事業を一体化させる時の課題であるともいえる。

岡田地区での協議会や地域住民の活動を円滑に行うことができたのは、地区で取り組まれている倉敷市と協議会との緩やかな共同体による生きがいがづくりと柔らかいリーダーの存在である。A氏とB氏は、小学校PTAというコミュニティの繋がりがあったことと、公務員という公共サービスに関する仕事をしていたことが岡田地区の地域福祉の向上に一役かかったと考えられる。すなわち、岡田地区全体を見る力と多様な人間関係を持っていることが地区をまとめる力になったのである。金田一耕助イベントは、今までと違った形でコミュニティを作り地域住民が繋がる切っ掛け作りにも役立っている。

6. 結論

本研究は、地方自治体による観光施策により、地域コミュニティでの人材育成がされていることについて分析を行った。岡山県旧真備町岡田地区の金田一耕助イベントを基に検証を行った。地方自治体にとって観光施策は、地域経済を活性化させるために不可欠なものになっている。しかし、地域密着型の観光施策をコミュニティツーリズムという形態で行うためには、地域住民の参加が不可欠になる。地域住民による観光客受入の姿勢は、地域の福祉的な基盤と関係があるといえる。本研究では、①まちづくり推進協議会の体制が行政と地域住民との風通しのよい意見の集約の手法が重要であることを指摘した。②観光客受入に必要とされるホスピタリティが地域住民のおせっかいという行動と関係性があることを導いた。③イベントの来訪参加者であるファンとの関わりによって地域住民がおせっかいで行う仮装という手法を通して新たなコミュニティを作り地域福祉を育てることができたことを明らかにした。

これらの結論で重要なことは、地域福祉の観点からの人材育成ができてきている点である。コミュニティツーリズムは、観光学の視点から住民参加を呼びかけている。しかし、地域住民にとってみると、柔らかいリーダーによって作られた緩やかな共同体の一員としてイ

ベント来訪参加者に接することができている。金田一耕助という地域ブランドが、地域住民を一つにし新たな地域価値を創造しているといえる。「おせっかい」というおせっかひにより来訪参加者を受け入れる地域住民の意識と行動が変化し地区の質を向上させている。

本研究により、岡田地区の地域住民の行動変化が起きたことを明らかにした。今後の研究課題は、協議会役員と地域住民の意識について指標を作り、数的に意識変化を明らかにすることである。また、今後の岡田地区における金田一耕助イベントを支える人材がどの様に増えていき、地域共同体として協働の体制を如何に構築していくのかについては追って研究を進めていく。観光施策と地域福祉との関係について、地域社会で生活する人々が観光客から受ける福祉的視点からの影響については、比較的長い時間の経過を経なければ見えてこない面もあるため長期的な研究課題となる。

【参考文献】

- 井手拓郎(2020)『観光まちづくりリーダー論-地域を変革に導く人材の育成に向けて』法政大学出版局
大橋謙作編(2014)『ケアとコミュニティ-福祉・地域・まちづくり』ミネルヴァ書房
加山弾・熊田博喜・中島修・山本美香(2020)『ストーリーで学ぶ地域福祉』有斐閣ステュディア
後藤麻里子(2010)「第Ⅲ部第1章 市民の参加をデザインする-多様なかかわりを生み出すスキル」妻鹿ふみ子編『地域福祉の今を学ぶ』ミネルヴァ書房、pp.228-237
塩野正人(2019)「観光まちづくり論の変遷における人材育成の位置づけ-経営・政策志向を相対化する視点の必要性」橋本和也編『人をつなげる観光戦略-人づくり・地域づくりの論理と実践』ナカニシヤ出版、pp.32-51
西村幸夫(2002)「まちの個性を活かした観光まちづくり」観光まちづくり研究会編『新たな観光まちづくりの挑戦』ぎょうせい、pp.16-32
原田正樹(2009)『共に生きること共に学びあうこと-福祉教育が大切にしてきたメッセージ』大学図書出版
松端克文(2018)『地域の見方を変えると福祉実践が変わる-コミュニティ変革の処方箋』ミネルヴァ書房

<参考資料>

- 岡田地区まちづくり推進協議会「第21回総会要領」令和2年5月
岡田地区まちづくり推進協議会「岡田まちづくりと金田一耕助コスプレの歩み」
観光庁WEBサイト、「人育てから始める観光地域づくり-観光地域づくり人材育成実践ハンドブック2015」、
<https://www.mlit.go.jp/common/001140684.pdf>、最終閲覧2021年11月9日

논문투고일 : 2021년 10월 02일
심사개시일 : 2021년 10월 18일
1차 수정일 : 2021년 11월 10일
2차 수정일 : 2021년 11월 15일
게재확정일 : 2021년 11월 20일

住民と行政による観光資源を活用した地域人材育成

－ 岡山県倉敷市岡田地区での金田一耕助イベントを事例に －

難波利光

観光施策をコミュニティツーリズムという形態で行うためには、住民の参加が不可欠になる。コミュニティツーリズムに必要なのは、地域住民の地域福祉力である。更に、地域福祉力を高めるための地域人材育成も必要になってくる。本研究は、地方自治体による観光施策が、地域福祉の観点をもった人材育成について考察を行う。研究対象は、岡山県倉敷市岡田地区の金田一耕助イベントである。結論として、地域観光づくりに必要な人材と地域福祉を高めるための人材の要素は類似していることが分かった。地域のアイデンティティになるコンテンツを通して、観光客と地域住民の交流を図ることは、地域に新しい価値創造を生む。また、地域の連帯感や、観光客という外からの刺激により生まれる。それは、地域福祉を高める要因になり、魅力ある地域が作られる。ゆるいリーダーシップは、地域住民を纏めるうえで重要な能力である。

The local human resource that utilized tourism resources by inhabitants and local government

－ The case of a Kosuke Kindaichi event of the Okada area, kurashiki-shi okayama-ken －

Toshimitsu, Namba

In order to type sightseeing measure with the form of community tourism, a local resident's participation becomes indispensable. A local resident's community welfare power is required for community tourism. Furthermore, the region human resource development for heightening community welfare power is also needed. This research considers the human resource development in which the sightseeing measure by a local governments had a viewpoint of a community welfare. The subject of research is a Kosuke Kindaichi event of the Okada area, kurashiki-shi okayama-ken. In conclusion, the element of the human resource for raising a community welfare and human resource for the production of local sightseeing is similar. Through the contents which an identity of the area, exchange of a tourist and a local resident induces new value creation in the area. Moreover, a sense of solidarity of the area is born by the stimulus from the outside called tourist. It becomes a factor which raises a community welfare and an attractive area is made. When loose leadership summarizes a local resident, it is important capability.